地域農業の未来を語る

―JAと県政が描く、次の世代への農業―

牧田県議×JAめぐみの渡邉健彦代表理事組合長 対談



牧田県議（左）／
JA めぐみの渡邉健彦 代表理事組合長（右）



「一人の千歩より、千人の一歩」

担い手不足、資材高騰、気候変動、施設の老朽化――農業を取り巻く課題に、JAと県政はどう向き合うのか。現場へ出向くJAの取組と、県の「楽しい農業・儲かる農業」を重ね、農業者の所得と地域の持続性を軸に語りました。

牧田県議　本日は、地域農業の現状から、これからのJAと県政の役割、そして次の世代へどうつなぐか、率直にお話ししたいと思います。

渡邉組合長　農業者の高齢化や後継者不足に加え、消費者の食へのニーズも変化しています。若い人に「農業は魅力のある仕事だ」と思ってもらえる環境づくりが大きな課題です。

牧田県議　農業は農産物を生産する産業であるだけでなく、地域の暮らし、文化、国の食料安全保障を支えています。JA、行政、地域が一緒になって、現場の声を具体策へ変えていきたいですね。

現場へ出向く――農家と一緒に考える

牧田県議　「出向く営農戦略」を掲げられています。なぜ、今あらためて現場なのでしょうか。

渡邉組合長　机上の数字だけでは、農家ごとの本当の課題は分かりません。職員が農家へ出向き、品質、収量、販売、資材、今後の経営まで一緒に考える。その積み重ねが、組合員から「わがJA」と思っていただける関係をつくります。

牧田県議　県は新たな農政方針で「楽しい農業・儲かる農業」を掲げています。政策は現場で使われて初めて意味を持ちます。JAの営農指導員、市町村、県の普及指導員が同じ農家を支える体制が必要です。

渡邉組合長　私は「一人の千歩より、千人の一歩」が大切だと思っています。専業農家だけでなく、多様な人が少しずつ農業に関わる地域をつくりたいですね。

「作れば赤字」を変える――所得と販売

牧田県議　肥料、飼料、燃料、機械が高騰する一方、農産物価格には十分反映されていません。「作れば赤字」では、次の世代へつながりません。

渡邉組合長　生産と販売の両方を強くし、販売取扱高を伸ばす必要があります。需要を把握し、品質と数量を安定させ、選ばれる産地になる。農家が翌年も再投資できる所得を確保することが基本です。

牧田県議　作ったものを売る「地産地消」に加え、地域の需要から作る「地消地産」も重要です。市場調査、ブランド化、名古屋圏への販売、学校給食や観光との連携を県も後押しします。

渡邉組合長　直売所「とれたひろば」は、消費者の声を生産者へ返す接点です。売場の情報を作付けや品質向上につなげていきます。

地域ごとに違う「担い手」の形

牧田県議　専業、兼業、法人、集落営農、定年後の就農などを組み合わせる「複線型」の担い手政策が必要です。就農後も、農地・住宅・資金・技術・販売を一つにつなぐ伴走支援が欠かせません。

渡邉組合長　JAめぐみの管内は5市8町村。平坦地から中山間地まで条件が異なり、一律の答えはありません。女性部、学校、行政、地域で農業を発信する人たちとも力を合わせ、地域に合う形を探ります。



スマート農業――導入後まで支える

渡邉組合長　デジタル地図、ドローン、集荷のデジタル化などを進めています。ただ、機械を入れただけでは成果になりません。使い方やデータ活用まで、導入後の支援が重要です。

牧田県議　高価な機械を一戸ごとに持つのではなく、共同利用、作業受託、リース、実証を組み合わせ、小規模農家にも効果を届けたい。目的は「機械を入れること」ではなく、作業を軽くし、所得を増やし、農業を続けられるようにすることです。

気候変動・災害に強い産地へ

牧田県議　猛暑、集中豪雨、鳥獣被害は経営を直撃します。耐暑性品種、水管理、ハウス環境制御、用排水路、鳥獣対策を産地単位で組み立て、県が重点投資する必要があります。

渡邉組合長　現場の変化は早い。JAがつかんだ被害や生育の情報を県へ素早く伝え、県の技術や事業を農家へ返す往復を、もっと速くしたいですね。

営農施設は地域の「共通インフラ」

渡邉組合長　ライスセンターなどは老朽化しています。再編・集約は必要ですが、距離や地形を無視して一律には進められません。JA、市町村、県が一緒に将来像を描く必要があります。閉鎖店舗の再活用も検討しています。

牧田県議　営農施設は個々の農家だけでなく、産地を支える社会基盤です。取扱量、運搬距離、維持費、将来の作付けを見える化し、国の制度も活用しながら、県が市町村間の調整役を担うべきです。



子どもたちへ、食と農の実感を

牧田県議　学校給食で地元農産物を使い、生産者の話を聞き、畑に触れる。食と農の距離を縮めることは、農業への理解と適正な価格への理解にもつながります。

渡邉組合長　食農教育、支店活動、直売所を通じ、「農業は面白い」「やってみたい」と感じる入口を増やします。子どもの体験は、家族や地域にも広がります。

対談を終えて――政策を所得と省力化へ

牧田県議　担い手、生産、販売、施設。県農政とJAの方向は重なっています。評価すべきは制度の数ではなく、農家の所得が増え、負担が減ったかです。現場の声を政策と予算へ届け、「農業を続けてよかった」と言える地域をつくります。

渡邉組合長　対話をJAの具体策にし、行政と共有して実行する。農業を守ることは、食、風景、文化、地域そのものを守ることです。一歩ずつ一緒に進めましょう。

「楽より楽苦（らく）」

人は誰しも「楽」を求めます。しかし振り返れば、仕事や地域活動、子育てなど、責任を背負い夢中になった時期ほど充実していました。苦労を美化するのではありません。歩かなければ足が弱り、頭を使わなければ鈍るように、適度な緊張と責任は心身への刺激になります。

楽を求め過ぎて人生が味気なくなる「堕楽」ではなく、少しの努力、責任、挑戦を楽しむ「楽苦」へ。人生100年時代、長さだけでなく、誰かの役に立ち、自分の役割を持ち続けることが健康寿命と人生の豊かさにつながります。「今日は、残りの人生の最初の日」。今を活かし、少しの楽苦を楽しみながら歩みます。





牧田ひでのり事務所

〒505-0022　美濃加茂市川合２丁目 9-5

TEL 0574-28-0013
FAX 0574-26-3038

発行責任：牧田秀憲